

## 豊田高専の伝統

豊田工業高等専門学校長 やまだ ようじ 山田 陽滋

“国立高等専門学校の東海地区体育大会は、昭和38年に豊田高専を会場に第1回大会が開催されて以来、今年で第60回を迎えます。限られた時間の中で第1回大会の記録を探し当てることはできませんでしたが、その後昭和41年にやはり豊田高専で開催された第1回全国大会の記録が残っていました。ガリ版印刷とおぼしき配布物には、競技種目ごとに入賞者の名前と記録が手書きで残されていました。当時を回顧するとき、今大会のすべての競技に参加する学生諸君には、ぜひ歴代の先輩たちがこれまで繰り広げて来た数々の名勝負に想いを馳せ、この歴史の重みとともに自分たちがあることを名誉に感じながら、正々堂々、最後まで力を出し切って戦っていただきたいと強く願っています。”

これは、私が「第60回東海地区国立高等専門学校体育大会」の大会長を拝命し、監修した競技パンフレットの巻頭言で綴った文章の冒頭段落です。その後、本稿を執筆する機会を得るまでのひと月余りの間に、体育大会は、週末に各地でにぎやかに競技種目が繰り広げられ、その成績が、それぞれの競技の顧問や担当の教員によってつぎの週明けに報告されてきています。学生諸君の奮闘ぶりとともに報じられる成績には、ソフトテニス男子個人ダブルス、女子団体優勝、水泳総合優勝などがあり、輝かしい成果は毎週のように報じられてきました。私は、体育大会長役を負って、主管の競技種目の大会に毎週のように出かけ、応援し入賞者を称えてきましたが、豊田高専の学生が活躍すると、やはり大変嬉しく誇らしい気持ちになりました。同時に、これまで長年にわたり受け継がれてきたであろう、文武両道を目指す学生君たちがベストを尽くすという、脈々と繋がる伝統的な精神の世代間の授受のようなものを背景に感じました。

体育系だけでなく、豊田高専が全国大会出場最多校のひとつに数えられるロボコン(ロボットコンテスト)、日本大会優勝3回を始め、同大会常連で世界大会でも注目されているロボカップの名前がすぐに挙がってきます。さらに競技実績だけでなく、1970年から始まった、1、2年生全寮制度におけるドミタイ(ドミトリー大会)というコンペを伴う催しも2003年の第1回以来、脈々と受け継がれてきています。近年のコロナ禍をも乗り越え、今年も、作品としての表現技術を着々と高めながら各寮各フロア対抗で演じられた動画が見事に披露されました。

さて、「伝統」は、使い手に便益が生じる便利な言葉で、それゆえにしばしば耳にする言葉でもあります。これは、難しい表現を使うと、「伝統」が解釈学的な概念を示すものである、つまりなぜ、そしてどのようにして伝統というものが生き残って



現在に至っているかを理解する上で必要な言葉である、だから便利に使われるということです。この「伝統」という言葉が原義で使われるようになったのは、少なくともあのルネ・デカルトの時代で16世紀に遡るそうです。当時は、芸術等文化の様式で、歴史を通じ受け継がれていくものが「伝統」でした。その後、伝統の対象は拡大し、20世紀に入りマックス・シェーラーは、受け継がれる様式ではなく、受け継ぐ人々の精神的態度こそが伝統の本質であると主張し、これが現在、「伝統」の定義に加わっています。伝統をただ演じるだけでは時代の変化についていけないから、伝統の担い手は伝統の中に身を置きつつ、現代向きに技能をアレンジして(過去と現在の)相互充足を図るという重層的な精神活動をそこに作用させているといえるでしょう。

来年の2023年、豊田高専は創立60周年を迎えます。これを記念して、今から記念講演の開催や記念誌の編集を企画しています。記念誌に収められる写真から窺い知れる学生諸君のプレイ、演奏、プレゼン等々は、彼、彼女らの頑張りの表れであり、そのときどきを彩るワンシーンの集まりでありましょう。しかしそれだけでなく、創立20周年から10年を単位としてこれまでに編まれた記念誌を読み繋ぐと、古くから催されるイベントに向かう学生諸君の表情の変化に豊田高専の伝統が浮かび上がってきます。そして、それらは今後さらに10年先、20年先と伝統のスリットによって見え隠れを繰り返す中で、それぞれの時代を反映した輝きをさらに増して行くに違いありません。